

この物語はフィクションであり、あらゆる実在の個人・法人・組織・団体などとは一切関係ありません。

この作品のすべての絵と文の著作権は、著作者である富美肉サロンに帰属します。一部でも全部でも無許可の転載、複製、転用、映像化等は禁止です。法律により罰せられます。

このファイルは体験版です。作中のごく一部を抜粋しています。

『久しき妹』より一部抜粋

とある休日前のこと。

やたらに残暑の厳しい秋で、昨日の雨のせいも青空の元でも妙に蒸し暑い、そんな日だった。この地方の天気予報はよく当たる。

公介のスマホが鳴った。また何かの公式サイトからのお知らせだろうと思いつつ、公介は身体を大きさに回転させてうつ伏せになった。持っていた漫画本を上手に落とし、スマホに手を伸ばす。もしかしたら友人からの遊びの誘いかもしれないし、高校からの何か大事な連絡かもしれない。家族から……ということはないだろうけれど。

画面上部をツン、とつつくように、軽くなでおろす。黒い文字を並べた白い枠がいくつも連なり、カーテンのように降りてくる。その中のうち、見慣れたメッセージアプリのマークの枠をつつきながら、公介はおやつ？ と思った。一部のみが表示されるメッセージは「明日の朝八時に起こ……」まで読めたからだ。画面はすでにアプリの起動画面になっているが、確かにそんな意味の文章が見えたような気がする。

朝八時に起こしてほしい？ そんなメッセージは学校からも友人からも送られてく

るようなものじゃない。ベッドに沈めていた体を起こし、アプリの起動を待つ。

一体誰からだろう？ 両親ではない。なぜなら両親は公介よりも早く起きるし、もし仮に起こしてほしいのだとしても、こんなスマホなどを使わず直接お願いにくるはずだ。そもそも、二人とも母の実家に泊まるために今夜は不在だ。本当は子供たちも連れていきたいけれど、今回は大人の話し合いだからダメ、だそうだ。話の流れ次第では、帰宅は明日の夜になると言っていた。ろくに遊ぶ場所もなく遊び相手もないおばあちゃんの家にあまり興味がなくなってきた公介にとっては、行かない理由を考えずに済んだ安心感のほう勝っていた。

そんなことはいいとして、ではこのモーニングコールを公介に頼んでいるのは誰だ。単なる間違いだろうか。送り主が友人だとすると、わざわざ公介に頼む意味が分からない。そんなことはそれぞれの親にでも頼めば済む話だ。公介はまさか新手の詐欺メッセージか？ などと訝しがりつつ、送り主の名前を確認した。するとそこには、ある意味で最も意外な人物の名前が表示されていた。

#改頁#

『●奇妙な物体』より一部抜粋

公介ははじめ、それがなんなのかよくわからなかった。真つ白な太い杭が二本、仲良くくつついて並んで分厚い雪をかぶっている。あるいは白に近いフードをかぶった顔のど真ん中に縦の線が入った巨大なのつぺらぼう。一瞬、公介はそんな形を連想した。そしてすぐに、自分が今なにを見ているのかを理解した。

それは四つん這いの状態でドアの方にもつすぐ向けられた、尻だった。こつちを向いた白いお尻がクリーム色の毛布をかぶっていたのだ。毛布は大事な部分を一切隠さず、ただその上部にかぶせられているのみだった。尻から脚まで、一糸まとわぬ女子の、下半身。それがこちらに向けられていたのだ。

一瞬とはいえそれが尻だと認識できなかつたのは、自分の下半身にあるものが存在しなかつたからだろうか。すなわち、ぶら下がる男性器と、そしてすでにモジャモジャという域に達しつつある陰毛とが、だ。それ以前に、どこか芸術を思わせるほど滑らかな曲線からなるスラリとした白尻の造形が、公介にそれが人間の尻なのだという事実を見誤らせていたのかもしれない。こんなに蒸し暑い中なのに、その白い塊が汗の一滴すらにじませていなかつたというのも、それに拍車をかけていたのかもしれない。一瞬の混乱のち、公介の脳はあつという間に自分が今、何を見ているのかを理解した。それでも彼の混乱はなおも続いていた。それはそうだろう。何が起こっている

のかはわかってても、なぜそれが起こっているのかはわからないままだからだ。

そう、今自分は完全に肌を露出した女性の、よつんばいの生尻を見ている。ほとんど尻しか見えていないが、それが少なくとも男性ではあり得ないということは一目で断言できる。場所は妹の部屋であり、尻は妹のベッドの上に乗っている。ということ。はつまり、その尻は妹のものである、ということだ。そこまではわかる。

わからないのはなぜ妹が裸になっているのか、だ。いやそれ自体はひよつとすると、そんなに珍しくもないことなのかもしれない。風呂上りはいうに及ばず、全裸には解放感からなのだろうかある種の楽しさがある。公介は紗奈が自室で何をしているのかなど、知りはしないのだ。妹はいわゆる裸族であり、一人で部屋にいるときは基本全裸なのかもしれない。さらに言えば部屋では全裸のではなく、全裸になりたいからこそ部屋にこもっているという可能性すらある。

昔むかし、ずっと昔。服をもつて妹を追いかけまわす母親と、イヤ！ と叫びながら逃げる幼い紗奈の姿を見ていたことを、公介は思い出していた。

『紗奈とは』より一部抜粋

友人達に曰く、紗奈の顔はかなりかわいい、らしい。

公介にとつて、いや兄にとつて妹の顔などは、飽きを通り越して空気のようなものだ。かわいいだとか、きれいだとか、逆にブスだとかなんだとか、そういう風を感じたことが、そもそもない。妹の顔は妹の顔であり、それ以上でもそれ以下でもない。それは妹に限らず、家族全員に対してそうだ。なんだつたら、いとこですらそうだ。幼い頃から見てきた顔の評価には、良いも悪いも存在しない。

ただ、身内を褒められる気分はそう悪くもない。逆にもしかわいくないとも言われたならきつと、腹を立てていたことだろう。幸いなことに、今のところクラスメイトからも誰からも、そういう否定的なことを言われたことはない。といつても、たまに聞こえるアイドルを目指させる、なんていう意見にはどうも賛成しかねる。紗奈の顔がそういうタイプの顔だとは、どうしても思えなかつたからだ。

ショートカットの毛先が、卵型というのか、そんな形の顔をくるんでいる。それはよく似合っていると思う。二重の細めの目が印象的で、鼻はまつすぐで、しかしりりしいという感じでもなく、小さく佇んでいる。唇というか口は小さい。要は頭も顔も

目も鼻も口もすべて小さく、それらがバランスよくまとまっている。かわいいといえ
ばかわいいのだと思うが、こう……どちらかといえれば薄い顔付きで、公介には昔なが
らの日本人的な顔つきに見える。妹の似顔絵を描くとすれば、……短い棒を四本だけ
でも成立しそうだ。目と口の位置に横線を、鼻のところだけは縦線で、というように
いや、それは言い過ぎか？ 目は線だけではなく、小さな点もつけたほうが似ている
かもしれない。口も実際にはそんなこともないだろうが、似顔絵なのだという点を考
慮すれば、線よりも点に近いかもしれない。

●『脚と脚との間』より一部抜粋

尻肉の白い肌は、右も左もピンク色からとところどころが赤く染まり始めているようだった。その輪郭の一部は明らかに自分の指の形をしていて、公介は気が付かないうちに入ってしまったのかと驚き、少し申し訳なさを感じた。視線は右から左、左から右に素早く動き、そしてその中心から少し下がった一点で止まった。

悪友に無理やり見せつけられた時に感じた不愉快さともまた違う、奇妙な不愉快さが胸を強く打っていた。この不愉快さは女性のアソコを見ているからではなく、その持ち主が妹だからこそ生まれてくるのだろう。公介はそう思った。なぜなら、公介は紗奈のそこに対し、あの時のような不気味さは感じていなかったからだ。

紗奈のその場所、かすかに集う産毛はとても柔らかそうで、同時にその部分に目を引く役割を担っているかのようでもあった。産毛に包まれたその部分は思っていたよりは平坦な形のように、しかし無性に触ってみたくなるような柔らかさを想像させた。スツと通る割れ目はきれいな一本の線のようにもあったが、それはかすかに開いているようだった。割れ目の左右には粘膜質で明るいピンク色のひだが少し顔を覗かせていて、さらにその奥にあるであろう、なんとも名状しがたいあの中身を少しでも隠そ

うとしてゐるかのようでもあつた。

ごくりと、唾液が喉を通つて行つた。音を聞きながら、公介はその音が外に聞こえないようにと強く意識していた。

生の女性器をここまでじつくりと、それもこんな明るい中で観察したのは生まれて初めてだ。しかしその持ち主は妹なのだ。それはとても控えめで慎ましく、いやらしさを感じさせない形状だった。それはきつと悪いことではないはずだ。とはいえ喜ばしいことだと言えるのだろうか？ 妹のアソコがきれいだからと喜ぶ兄はおかしい、というのは当たり前だが、それ以前の話だ。それがどのような雰囲気をもっているかなど関係なく、紗奈は兄に己の股間を見せつけてきている、そういう下品極まりない行為をしてきているという事実をどう捉える？

心臓は破裂せんばかりに鼓動し、公介の心理を沸き立たせていた。手やアゴが震えだして止まらない。膝も意識しないときつと、ガクガクと震えてすぐにでも崩れ落ちてしまふだろう。自分はたしかになんらかの興奮をしているようだが、これは一体どういふ種類の興奮なのだ？ 怒りだつて興奮だし、スケベ心も興奮だろう。泣くときだつて興奮しているといえるだろうし、笑つたり喜んだりするのだつて興奮だ。自分

は今、目の前にあるコレについて、どう興奮しているのだろう。なにを思えばいいのか公介には全く分からなかったし、それゆえに彼はその興奮を抑えることだけに必死で、ただその部分を見つめる以外に動くことができないまままでいた。

『●接合』より

一物にまとわりつく肉はとても華奢で——そこに入った異物を追い出す力がないことは明らかだった。それでいてその中は公介の棒にみっちり張りついてきたので、公介は自分のモノが凶悪な異物にでもなったかのような錯覚を覚えた。角度を付けて中をかき回せば、そこはほとんど抵抗なくその動きに従い変形するだろう。まだそんなことはしていないが、瞬間的にそうなのだろうと身体が理解していた。あまり急角度にしてしまつては——指でもないのだから、そんなことはできやしないけれど——あつさりと破れてしまいそうな儂さがあつた。

その儂さが逆に、むしろどこまでも男根を突つ込んでみたくなるような興奮を公介にもたらしていた。

「んツ……！ んんツ……！ おつきい……」

進めば進むだけ、亀頭を包む快感が加速度的に増していく。亀頭が飲み込まれ、続く竿にも紗奈の柔肉が絡みつく。公介の頭の中でラツパのような音が鳴り響いた。この快感はまさにラツパ、その形そのものだ。行きつくところまで行けばどれほど広が

るのか、それを想像すると、その動きを止めることは不可能だった。

紗奈の奥。肉の袋の終端。半分くらい入れたところで、公介はそこにたどり着いたと知った。しかしその長さはもつと伸ばせるはずだ。紗奈の柔らかさならきつと、陰茎の形をすべて受け入れるに違いない……。

「あ……ああ……！ あッ……！ ふ、深いよお……！ んッ……！」

寝ているはずの紗奈は意味のある言葉をつぶやき始めている。公介はあえてそれを耳にしていないふりをして、とうとう自分の全てを紗奈の中に入れた。太ももの付け根に紗奈の体温が当たった。勢いがあったのか、尻骨が刺さりすこし鈍い痛みもあった。それが全く気にならないほどの、妹のマ○コの快感。思わず、我を失いかける。

気持ちいい！ 柔らかい！ あったかい、気持ち良すぎる！

入れてしまった、入れてしまった！ 入れてしまった！ 紗奈としてしまっている！
気持ちいい！ 柔らかい！ ヌルヌルした！ 女の体！

理性の訴えは内から強く響くも、それ以上に強固な感情がその声を完全に封じ込めていた。久しぶりだからというだけの理由だけではありえない快楽が、公介の体と理性を包みこみ完全に封鎖してしまっていた。

体験版は以上となります。ご利用いただきありがとうございます。ございました。